

指導資料



鹿児島県総合教育センター

社会 第112号

—中学校，特別支援学校対象—

平成21年5月発行

「基礎・基本」の確実な定着を図る中学校社会科学 学習指導の工夫—小・中学校の系統性を踏まえて—

国立教育政策研究所が平成19年1，2月に実施した「特定の課題に関する調査（社会）」には，歴史上の人物と業績に関する問題が小・中学校共に出题された（出題形式は異なる）。その結果は，小学校と比較して中学校の通過率は全般的に高かったものの，歴史的分野の「歌川広重」や「足利義満」の業績について正しく述べた文を選択させる問題の通過率は，小学校より15%以上低かった。一方，地理的分野の「47都道府県の名称と位置」に関する問題についても小・中学校共に出题された（出題形式は異なる）が，通過率の低い県の名称と位置は，同様の傾向が見られた。

また，平成19年11月に出された中央教育審議会の『教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ』にも「中学校段階においては，小学校段階で身に付けた知識・技能の活用といった観点から，単元に応じて小学校段階の教育内容を中学校教育の視点で再度取り上げて指導するといった工夫」が必要であると述べられている。

これらのことから，「基礎・基本」を確実に定着させるためには，小・中学校の系統性を踏まえて指導することが重要である。

そこで，本稿では，「基礎・基本」を確実に定着させるための中学校社会科学学習指導の工夫について，小・中学校の系統性を踏まえながら，単元「縄文文化と弥生文化」の授業展開例を基に述べる。

1 「基礎・基本」の確実な定着を図る学習指導の工夫の視点

「基礎・基本」の確実な定着を図る学習指導の工夫について，系統性を踏まえながら，単元「縄文文化と弥生文化」の授業の展開において，以下の点を中心に述べる。

- (1) 導入における小学校の指導内容の確認
- (2) 学習課題の設定における留意点
- (3) 展開における資料活用の工夫
- (4) 終末におけるまとめ方の工夫

2 「基礎・基本」の確実な定着を図る学習指導の具体的改善策

- (1) 導入における小学校の指導内容の確認
導入においては，まず，小学校の指導内容がどれだけ定着しているか確認を行いたい。具体的には，生徒の関心を高めさせるために，小学校の指導内容を基に弥生土器の模型等を使用したり，弥生時

代のむらの生活（図1）の資料を提示したりするなどの工夫が考えられる。この後に、例えば、図1を提示し「この資料は何時代のむらの生活を表しているのだろう。」と発問し、その理由まで答えさせる。生徒が弥生時代であることに気付いたら、さらに「弥生時代の人々はどのような生活をしていただろう。」や「稲作の技術はどこから伝わったのだろう。」など、具体的に発問し、小学校の指導内容の定着の確認を行う。また、プレテストの実施によって、表1で示した小学校の指導内容の確認を行い、確実に定着しているかどうか把握する方法もある。なお、定着が不十分な場合は、授業の中での補充や終末段階でのポストテスト等により確実な定着を図りたい。



図1 弥生時代のむらの生活 「新しい社会 歴史」 東京書籍

- ・ 米づくりの技術はおもに朝鮮半島から伝わった。
- ・ 福岡県の板付遺跡、佐賀県の吉野ヶ里遺跡→弥生土器、石包丁、たて穴住居、水田跡
- ・ むらはほりに囲まれており、身分の差が生まれる（むらを支配する豪族）。
- ・ 銅鐸、銅剣や鉄の道具が使われた。
- ・ むらとむらとの間で争う。
- ・ まわりのむらの豪族たちをしたがえて、くにをつくり、王（首長）と呼ばれる人があらわれる。

表1 小学校の指導内容

(2) 学習課題の設定における留意点

本単元において何を学習し理解すればいいかを生徒に明確に示すことは、「基礎・基本」の確実な定着を図ることにもつなが

ることから、学習課題の設定には十分配慮したい。

そこで、学習課題を設定する際の留意点について次の2点を中心に述べる。

ア 学習指導要領の内容（※現行学習指導要領による）

まず、この単元における学習指導要領の内容について系統性を踏まえながら確実に押さえておきたい。この単元では、「日本列島で狩猟・採集を行っていた人々の生活が農耕の広まりとともに変化していったことを理解させること」がねらいである。一方、小学校の内容は「農耕が始まったころの人々の生活や社会の様子が分かるようにすること」となっている。つまり、小学校では、農耕が始まったころの生活や社会の様子について学習している。そこで、中学校ではこうした小学校の学習指導要領の内容を踏まえた上で、縄文時代と弥生時代を比較させながら、むらの生活の変化に着目させた学習課題の設定を行いたい。

イ 社会認識形成

社会科は、「社会認識形成を通して、市民的資質を育てる」教科である。「社会認識を形成する」とは、「世の中（社会）の仕組みや様子が分かること」と考える。この社会認識は、社会的事象の事実を知る段階から、その因果関係について理解できる段階、さらには社会的事象の一般的な傾向や法則性を理解できる段階にまで深めさせていく必要がある。その上で、学んだことを活用して身近な社会的事象について考察できる段階にまで育てていくことは、社会科の究極のねら

いである「公民的資質の基礎」を養うことにつながる。こうしたことから、生徒の社会認識を深めさせるために、問いにも留意して学習課題を設定したい。図2は、学習課題の問いと社会認識形成との関連をまとめたものである。この図2のように身に付けさせたい社会認識によって学習課題の問いの仕方が変わってくる。

このように学習指導要領に示された内容、社会認識形成の段階に留意し学習課題を設定したい。この単元においては「農耕の広まりによって、人々の生活が変化していったこと」を理解させるために、例えば「稲作が始まったことで、人々の生活はどのように変化していったのだろうか。」と言う学習課題が考えられる。

(学習課題の問い)	(社会認識形成の段階)	(社会認識の深まり)
<ul style="list-style-type: none"> ・ どうすべきか？ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学んだことを活用して身近な社会的事象について考察できる。 	社会的事象についてより深く理解する  社会的事象の事実を知る
<ul style="list-style-type: none"> ・ なぜ？ ・ どのように？ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 社会的事象の一般的な傾向や法則性を理解できる。 ・ 社会的事象間の因果関係について理解できる。 	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 何を？ ・ だれが？ ・ どこで？ ・ いつ？ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 社会的事象についての事実を知る。 	

図2 社会認識と学習課題の問いとの関連

(3) 展開における資料活用の工夫

展開においては、まず、縄文時代のむらの生活を表した図3の資料や、図1の弥生時代の資料、教科用図書等を基に、小学校の指導内容（弥生時代の生活の様子）も踏まえ、それぞれの時代の人々の生活の様子について気付いたことを発表させ、教師が板書しまとめていく。次に、まとめたことを基に稲作の始まりによって人々の生活がどのように変化していったかについて考え

させ、発表させる。生活の様子の変化に気付かせるためには、次のような資料活用の工夫が考えられる。

ア 図1や図3の資料を生徒全員に配り、資料を比較させ、相違が見られる箇所に色鉛筆等で印を付けさせる。

イ 生徒に縄文、弥生時代の生活の様子の違いについて一層気付かせるために、必要に応じて学習指導要領解説社会編に示されている「新たな遺跡や遺物の発見による考古学の成果などの活用」を図りたい。具体的には、例えば、縄文時代の代表的遺跡である「上野原遺跡」の資料や、弥生時代の代表的遺跡である「吉野ヶ里遺跡」の資料（物見やぐら、環濠、王の住まい、高床倉庫の資料など）の活用を図り、資料を比較検討させ、生活の様子の相違点に気付かせたい。

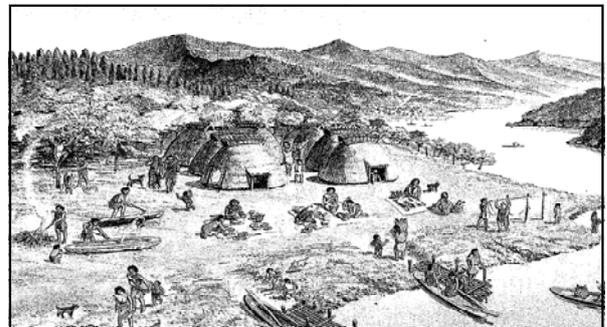


図3 縄文時代のむらの生活 「新しい社会歴史」東京書籍

表2は小学校における資料活用の能力を小学校の新学習指導要領解説を基に系統的にまとめたものである。中学校においても、これらの資料活用の能力の育成を一層図っていくことで、諸資料に基づいて多面的・多角的に考察する力を育成していきたい。したがって、縄文時代と弥生時代のむらの生活を表した資料を比較させ、変化の様子を考察させる際に、その違いを色鉛筆等で

印を付けさせることは、表2に示されている複数の資料を関連付けて読み取る力の育成を図っていくことにつながる。なお、資料を読み取るポイントについては、指導資料社会第102号（平成16年発行）の「学び方カード」を参考にしたい。

第3・4学年	第5学年	第6学年
必要な情報を読み取る。		必要な情報を的確に読み取る。
複数の資料を関連付けて読み取る。		特徴に応じて読み取る。
全体的な傾向をとらえる。		
必要な資料を収集する。	必要な資料を収集したり選択したりする。	必要な資料を収集・選択したり吟味したりする。
資料を整理したり再構成したりする。		

表2 資料活用能力の系統（小学校）

(4) 終末におけるまとめ方の工夫

こうした授業を展開した後、課題解決の段階では、生徒に学習課題に対するまとめを文章で書かせたい。その際、文章でまとめることが苦手な生徒には「稲作の伝来」や「定住生活」などのキーワードを教師が示し、それらを使って書かせるなどの配慮が必要である。また、教師は学習課題のまとめを確実に板書し授業の内容を振り返ったり、ポストテストを実施したりして、「基礎・基本」の確実な定着を図る。

最後に、これまで述べてきた単元「縄文文化と弥生文化」の授業の展開例を図4に示す。

過程	指導上の留意点 ※小牧の講義内容との懸
導入	1 弥生土器の模型等を使用し、生徒の関心を高めたり、弥生時代のむらの生活（図1）の資料を提示し、小学校の学習内容を想起させる（※）。 2 学習課題を確認させる。
	稲作が始まったことで、人々の生活はどのように変化していったのだろうか。

展 開	3 縄文時代のむらの生活を表した資料（図3）や、弥生時代のむらの生活を表した資料（図1）、教科用図書等を基に、縄文・弥生時代の人々の生活の様子の相違点について気付くことをまとめさせ、発表させる（※）。 （縄文時代） ○ 縄文土器の使用、狩りや採集が中心、貝塚、土偶、たて穴住居 （弥生時代） ○ 弥生土器の使用、稲作が中心、高床倉庫、金属器（青銅器、鉄器）の使用
	4 縄文、弥生時代の人々の生活の様子についてまとめたことを基に稲作の始まりによって人々の生活がどのように変化していったかについて考えさせ、発表させる。 ○ 人々の生活の様子の変化について気付かせるための補助資料として、「上野原遺跡」の資料と「吉野ヶ里遺跡」の資料を使用し比較させる。 （稲作の始まりによる生活の変化） ・ 移動生活から定住生活へ ・ 「むら」の発生 ・ 余剰生産物の発生 ・ 平等な社会から貧富の差の発生 ・ 支配者、被支配者の形成
終 末	5 学習課題のまとめを文章で書かせる。 稲作の伝来によって人々の生活は定住生活が中心となり村をつくるようになった。また、貧富の差が生まれ支配者が出現した。 6 ポストテストで本時の内容の確認を行う。

図4 単元「縄文文化と弥生文化」の授業の展開例

小・中学校の系統性を踏まえながら、「基礎・基本」の確実な定着を図るための中学校社会科学学習指導の工夫について、単元「縄文文化と弥生文化」の授業展開例を基に述べてきた。小学校の指導内容等を踏まえて、授業を展開し改善を図っていくことは、「基礎・基本」の一層の定着につながる。各学校においても、本稿で述べてきた授業例を参考に授業の工夫改善に努めていただきたい。

（教科教育研修課）